様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 ２１年 ４月 ３０日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９８３０１０３
研究課題名（和文）シジウィックの思想体系の再構築：倫理学・経済学・政治学の関連から

研究課題名（英文）Reconstruction of Sidgwick's System of Philosophy: From the Interrelationship between Ethics, Economics and Politics

研究代表者
中井大介　（DAISUKE NAKAI）
近畿大学・経済学部・講師
研究者番号：７０４５４６３４

研究成果の概要：　本研究の目的は、19 世紀後半にイギリスで活躍した哲学者で、古典的功利主義者として知られるヘンリー・シジウィックの哲学体系を再構成すること、ならびにその現代的意義を明らかにすることである。そこで報告者は、倫理学・経済学・政治学を三本柱として構成される、シジウィックの哲学体系を再構成する研究書として、単行本『功利主義と経済学：シジウィックの実践哲学の射程』（2009 年 3 月晃洋書房）を公刊するなどした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,020,000	0	1,020,000
２００８年度	1,130,000	339,000	1,469,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,150,000	339,000	2,489,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：経済学、経済学説・経済思想
キーワード：功利主義、シジウィック、ミル、経済思想、経済と倫理

１．研究開始当初の背景

報告者の研究は、功利主義倫理学者として著名なシジウィックの主著である『倫理学の諸方法』(1874)、『経済学原理』(1883)、および『政治学要論』(1891)の相互関係を明らかにすることで、シジウィックの思想体系を具体的に再構築するものである。彼の哲学体系を再構築する試みは、シジウィック自身の思想の全体像を解き明かすのみならず、哲学体系の中に位置づけられる倫理学・経済学・政治学という学問領域の相互関係の意義を問いかける試みでもある。功利主義を批判する形で自らの正義論を展開するロールズまでもがシジウィックの功利主義を絶賛しているように、現代的意義をもつ優れた倫理学者であったシジウィックの『倫理学の諸方法』と『経済学原理』の直接的関係を明らかにすることには、近年注目を集めつつある「経済と倫理」という問題に新たな解決の道を拓く可能性が秘められていると考えられる。

２．研究の目的

『倫理学の諸方法』『経済学原理』『政治学要論』の直接的関係を明らかにすることで、

倫理学・政治学・経済学からなる三位一体のシジウィックの思想体系の構造が解明することが本研究の目的である。

そこでさらに、従来のような倫理学者としてだけでなく、経済学者・政治学者としてのシジウィックの重要性を広く国内外にアピールしていくことで、アダム・スミスやジョン・スチューアート・ミルに恐らく唯一比肩しうる可能性を秘めた社会哲学者としてのシジウィックのプレゼンスを高めることも強く念頭に置くものである。

３．研究の方法

報告者がシジウィックの哲学体系ないし諸著作の相互関係を読み解く際に用いる方法は、『倫理学の諸方法』で提示された「実践理性の二元性」である。「実践理性の二元性」とは、究極的な個人のなすべき行為には、自分自身の幸福を最大化する利己主義の方法と、社会全体の幸福を最大化する功利主義の方法という、異なる二つの方法が存在し、時として両者は対立しうるというものである。換言すれば、個人の内面において利己心と利他心は完全には統合されえないという見解である。シジウィックは、個人の道徳的洗練によって、利己心と利他心が完全に統合されうると信じたミルを強く牽制するかたちで、自らの倫理に関する結論として「実践理性の二元性」を打ち出したと報告者は見ている。これまでに「実践理性の二元性」は倫理学研究において大きな注目を集めてきており、『倫理学の諸方法』出版当時から今日に至るまで賛否両論を巻き起こしつづけている。しかしながら、報告者が独自に注目するのは、個人のなすべき行為を導く規範原理が二つ存在すること自体に、様々な社会的問題や摩擦を引き起こす根本原因があるとシジウィックが考えているように思われることである。そこで利己主義の方法と功利主義の方法という二つの規範原理との関係を通じて、『経済学原理』や『政治学要論』の意義を具体的に検討することが重要であると思われる。つまり「実践理性の二元性」こそが、シジウィックの『経済学原理』や『政治学要論』の特徴やその意義を説き明かすうえで欠かせないと考えられるのである。

４．研究成果

本研究の意義は、最後の古典派経済学者とされる J.S.ミルと近代経済学の始祖とされる A.マーシャルの間に位置するシジウィックの経済学に注目することで、現代経済学の形成過程とその性質を読み解く上で示唆を得られるだけにとどまらない。政治や倫理と直接関連する問題として考え抜かれたシジウィックの経済学を明らかにすることは、包括的・学際的な経済学研究が求められている現状にあって、極めて高い現代的意義を備えていると考えられる。

申請者が大学院時代より進めてきた、倫理学・経済学・政治学からなるシジウィックの哲学の全体像を明らかにする研究を纏め上げる形で、単行本『功利主義と経済学：シジウィックの実践哲学の射程』（晃洋書房 2009 年３月）を刊行した。またその他の論文や研究発表については、「５．主な発表論文等」に記載しているとおりである。以下では、『功利主義と経済学：シジウィックの実践哲学の射程』の序文と結論部分を引用することで、研究成果の具体的内容について記したい。

ヘンリー・シジウィックは、ヴィクトリア後期に活躍したイギリスの哲学者であり、ベンサム、J. S. ミルに続く、傑出した古典的功利主義者として知られる。本書の目的は、これまで注目されていないシジウィックの経済思想を通じて、経済学と哲学の関係を考察することである。そこで、特に次の三つの点を明らかにしたい。

第一に、シジウィックが倫理学・経済学・政治学を軸にした哲学体系を構築しようとしたことである。彼は『倫理学の諸方法』(1874)において、個人は合理的に行為しようとしても、利己心と利他心の葛藤から完全には逃れられないと結論付けた。これは「実践理性の二元性」と呼ばれ、個人の倫理に関するネガティブな主張と見なされることがある。しかし、『経済学原理』(1883)や『政治学要論』(1891)まで見渡すなら、むしろ積極的意義が見いだされることになる。利己心と利他心の狭間で葛藤しうる現実的な諸個人を想定することで、シジウィックは実践的な政府の役割を体系的に展開したと考えられるのである。

第二に、シジウィックを足がかりとして、功利主義という思想の特徴を描き出したい。「最大多数の最大幸福」として知られる功利主義であるが、その中身については誤解されることさえ少なくない。ロールズなどが指摘するように、ベンサムやミル以上に洗練された功利主義者であるシジウィックの哲学を通じて、現代の経済学の背後にある思想ともいえる、功利主義の特徴を描き出すことにしたい。

第三に、シジウィックがミルを乗り越えようとしたことに注目したい。シジウィックは、ミルの倫理思想には見逃せない問題点があると考える。利己心を超克した利他的な人間

性の発展によって、個人の真の幸福は実現されるという点である。そこでシジウィックは、「実践理性の二元性」を打ち出すことで、利己心と利他心の統合は不可能であると断じたのである。こうした倫理観・人間観を端緒として、ミルとは異なる文明社会のヴィジョンが示される。ミルが共産主義に期待を寄せたのとは対照的に、シジウィックは、あくまで個人主義を基盤としながら、そこに一定の社会主義的な政府介入を導入していく道を示すのである。

本書では、19 世紀後半の時代背景を睨みながら、倫理学・経済学・政治学の各著作を読み解くことで、シジウィックの哲学の特徴を浮かび上がらせることになる。宗教的価値観が後退していくなかで、社会を調和させる人類共通のモラルは一体どこに存在するのか。大不況に突入していくなかで、自由放任に依拠して経済問題を乗り切っていくことができるのか。一般大衆へと選挙権が拡張されていくなかで、民主主義の徹底こそが最善の進路なのか。ヴィクトリア後期に表出するようになったこれらの難問と格闘するなかで、シジウィックの哲学は練り上げられていったのである。

しかし、シジウィックの取り組んだ問題は、現代の私たちが今なお直面している問題でもある。そして、功利主義を軸にしてこれらの問題に挑んだシジウィックの哲学から、現代の私たちが学ぶところも決して少なくはないように思われる。

第一章では、シジウィックの人物像と時代背景を踏まえながら、哲学体系の構築へと彼を駆り立てたものとは、一体何であったのかを考察する。第二章では、『倫理学の諸方法』で提出された「実践理性の二元性」に注目し、このミルとは異なる見解が、シジウィックの哲学体系の出発点となることを明らかにする。第三章では、サイエンスとアートの領域に区別される、『経済学原理』の特異な構造に着目しながら、大不況の中で不安定な状態に陥った経済学をシジウィックが再建しようとしたことを明らかにする。第四章では、『政治学要論』第一部で、弾力的な功利主義を規準とすることで、個人主義と社会主義を調停させる政府の役割をシジウィックが示そうとしたことを考察する。第五章では、『政治学要論』第二部で、貴族制と民主制という両軸の間でのバランスを通じて、シジウィックが望ましい政府の在り方を追究したことを考察する。最後に第六章では、シジウィックの哲学全体を概観しながら、彼の経済思想の現代的意義について検討する。（以上「はじめに」より）

なぜシジウィックは哲学体系を構築しなければならないと考えたのだろうか。そこで想起されなければならないのは、19 世紀後半という時代背景である。とくにシジウィックが実証主義や進化論に代表される、当時隆盛を究めつつあった科学主義を強く牽制しながら、アダム・スミスやミルと基本的には同じ方針に立って、現実の社会の人間の思考や行動から経験的に引出される倫理学や道徳をベースにした実践哲学体系を提唱したことである。進化論や心理学などをベースにして実証的な社会学体系を論じるスペンサー流の社会科学や、数学的理論に依拠する傍らで合理的経済人を社会の人間像として据える経済理論によって、経験的考察に基づく倫理学や道徳に依拠する伝統的な学問体系が置き換えられてしまうことにシジウィックは強い危惧を抱いていた。

こうした点について、たとえばシジウィックは脱宗教の困難な時代にあって個人の倫理における利己心と社会的義務が一致しないことにうろたえていたとか、マーシャルの潔さとは対照的にモラル・サイエンスから経済学を切り離すことに頑なに反対したとだけ指摘されることがある。しかし見落としてはならないのは、シジウィックは学問体系を彼なりのかなり大胆な方法で区別・整理することで体系立てて論じようとしたことである。当時の学問的にもあるいは社会的にも混乱した時代の要請はすでに昔ながらのモラル・サイエンスに満足するものではなかったし、シジウィック自身もそのように強く感じていた。けれども、同時に彼がスペンサーやコント流の社会科学の体系とは明らかに異なる形で、実践哲学と称する自らの体系を構築しようとしたのは、経験的に導かれる人間の道徳観・倫理観を切り離して社会的問題を扱うべきではないという譲ることのできない彼の確信があったからにほかならない。換言すれば、個人主義と社会主義の対立や民主主義の台頭といった政治的・経済的に非常に激しい論争が巻き起こっていた 19 世紀後半という困難な時代にあって、実証主義や進化論に依拠してそうした困難を乗り切ることは不可能であり、伝統的なモラル・サイエンスを実践哲学として再建することでそうした困難に対して建設的な指針を導き出すことが可能になるとシジウィックは考えたのであった。

シジウィックの発した問題は、サイエンスを発展させた現代の私たちにとってすでに解決済みの問題であるのだろうか。あるいは「実践理性の二元性」というモラルの問題を私たちはすでにクリアしているのだろうか。むしろ、現代の社会科学がシジウィックの危惧した経路を突き進み、倫理的考察を周辺に追いやりながら理論研究や実証研究を推し進めてきたことで、様々な現実的困難を広い視野から実践的に扱うことが出来なくなっ

ている面もあるのではなかろうか。当然シジウィック自身の哲学体系が完全な処方箋であったと断ずることはできないが、少なくとも社会的問題に取り組む際に切り離すことのできない、人間にとっての望ましい生き方とは何か、あるいはあるべき社会とは何かという根本的な哲学的問題を忘れてはならないことをシジウィックはいまなお私たちに訴えかけてくるのである。

シジウィックの哲学体系が完全であるということではない。慎重に議論を進めるあまり、彼は懐柔的な結論や妥協へと向かうことになった。しかし、単なる懐疑主義で終わるのではなく、実践的な哲学体系の構築へと向かったのである。「実践理性の二元性」のように論理的・合理的に解決されそうにない問題に直面しても、ぎりぎりまで踏み込んでから見切りをつけ、実践を重視する形で社会全体の調和的発展を展望したのである。そして、慎重に物事を見据えた深い洞察を通じて、人間や社会の本質が射抜かれているのである。
（以上「おわりに」より抜粋）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）（全て単著）
① 中井 大介「シジウィック『政治学要論』と J.N. ケインズ」『香散見草』No.37 (2008) ,pp.7- 10
② 中井 大介「シジウィックの社会哲学」『生駒論叢』 第 5 巻第 3 号 pp.113-136 2008 年
③ Daisuke Nakai ‘Sidgwick’s Social Philosophy’ Kinki University Working Paper Series No.E-6. 2007 年

〔学会発表〕（計７件）（全て単独の発表）
① Daisuke Nakai ‘Science and Art in Sidgwick’s Political Economy’ Young Scholars Seminar 2009 年 3 月 関西大学
② 中井 大介「シジウィック：実践哲学としての倫理学・経済学・政治学」第 20 回京阪経済研究会 2008 年 11 月 キャンパスプラザ京都
③ 中井 大介「功利主義の諸相：経済思想と政治思想の観点から」名古屋大学社会経済研究ワーキングショップ 名古屋大学 2008 年 5 月
④ 中井 大介「シジウィックの社会哲学」京阪経済研究会・市場社会をめぐる研究会 キャンパスプラザ京都 2008 年 1 月
⑤ 中井 大介「ミルとシジウィックの功利主義観の相違」近代経済学史研究会 関西学院大学大阪キャンパス 2007 年 11 月
⑥ 中井 大介「シジウィックの社会哲学」市場社会をめぐる研究会 上智大学 2007 年 4 月
⑦ Daisuke Nakai ‘Sidgwick’s Social Philosophy’ The 11th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Louis Pasteur University - Strasbourg, France, July 2007

〔図書〕（計２件）（全て単著）
① 中井 大介『功利主義と経済学：シジウィックの実践哲学の射程』晃洋書房 ２００９年３月
② 中井 大介「シジウィック － 実践哲学としての倫理学・経済学・政治学」平井俊顕編『ケンブリッジの社会哲学』所収 2009 年 6 月刊行予定

６．研究組織

(1)研究代表者
中井 大介 (DAISUKE NAKAI)
近畿大学・経済学部・講師
研究者番号：７０４５４６３４

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし